

## 78 《聖マタイの召命》

眼鏡の男に向かう4つの補助線

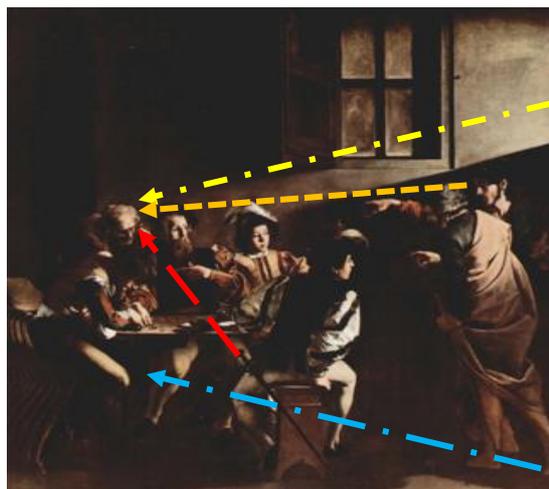
2024（改訂版）

真鍋友範



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

### 1 カラヴァッジョの視線誘導補助線計画



父なる神の啓示の光(1)イエロー・イエスの視線(2)オレンジ・背を向けて座る若い男の持つ剣の軸線(3)レッド・ペテロの両足間の軸線方向(4)ブルー

眼鏡の男には、4種類の秘められた視線誘導補助線が存在する。

ルネサンス期の画家ならば、有能な画家は皆、視線誘導計画を持っていたであろう。

レオナルドは、有名な《最後の晩餐》において、一点透視図法を応用してイエスへの視線誘導構図を完璧に作り上げていた。

また、同じく彼の《岩窟の聖母・ロンドン版》においては、頭部中心軸線と視線を用いた画期的な視線誘導を工夫している。

ルネサンス絵画には、本編ストーリーを補助する役割の登場人物、例えば天使やニンフなど、あるいは、登場させた描いた画家本人の視線は、画面の外に送られ、結果として、見る側の視線を画面内に誘い込むような役割を与えている。

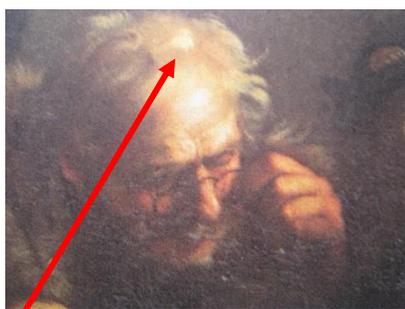
では、カラヴァッジョは《聖マタイの召命》に於いても、同じように視線誘導補助線の工夫が見られる。

次に、具体的に検証しよう。

## 2 神の啓示の光 (1)

現地ではほとんど目に止まらないレベルの描画であるが、画集などで見ると、明確に目に止まるのが、この【父なる神からの啓示（導き）の光】だ。

この光は、光点として眼鏡の老年収税人の頭頂部に見ることができる。



\*無視できない明確な描写

この光は、一体どこから到達しているのか。

天窗が考えられるかもしれないが、天窗からの光は広く拡散するから、このような点光にはならない。

コンタレッリ礼拝堂の西高窓には、夕刻の太陽光が差し込む。この環境効果

を生かして、カラヴァッジョは画面右側からの太陽光を描いている。

この太陽光に紛れて、父なる神からの啓示の光であるとすれば、説明可能だ。

光のルートは暗示されている。それは画面背景の格子の高窓にある木製内窓の下側のライン沿いに影が発生していることから、この補助線ラインに沿ってもたらされていると判断できる。(前出の図版参照：イエローの一点破線)

ところで、ローマ・カトリック教会は、なぜこの重要な表現に気づかなかったのだろうか。

ルネサンス期には、よく受胎告知の場面で、告知する大天使をマリアへと導く父なる神からの啓示の光は描かれていた。



《受胎告知》 1486 カルロ・クリベッリ

ローマ・カトリック教会関係者の宗教美術への理解度は、当時も、思ったほどに高くはなかったのだろう。だからカラヴァッジョの描いた内容が見過ごされたのだ。

### 3 イエスの視線 (2)

イエスの視線は、イエスの目を凝視しても分からない。  
しかし、イエスの右腕の身体動作から、ある程度正確に分かる。

イエスは指差していない。

イエスは指差している、と考えたら、そこで、あなたの判断は、もう誤りだ。  
一つの実験をしよう。

目標の人物を任意に設定する。次に向こう側のあなた、という意味で右腕を回してみよう。右腕の止まる位置は、普通目指す相手の顔付近だ。なぜなら、顔を見てないと、手を止める位置が定まらないからだ。

すると、一つの事実突き当たる。

自分の目と、動きを止めた手の甲を結ぶ線の向こうに、相手の顔が存在する。

この実験結果を、イエスに当てはめよう。

イエスの目と、イエスの手の甲を結び線の先に浮かび上がる人物は二人。

眼鏡の男、あるいは質問した髭の男のどちらかだ。

しかし、誰を探しているのかを聞いた人物は、髭の男なのだから、この場合、髭の男は、目的人物から除外される。

つまり、イエスの視線は眼鏡の男に注がれている、という結論に到達する。

#### 4 背を向けて座る若い男の持つ剣の軸線 (3) レッド

この軸線に気づくには、まず先に眼鏡の男の頭頂部の光点、つまり父なる神からの啓示の光の存在に気づく必要がある。

この点に気づけば、次に背を向けて座る若い男の持つ剣の角度が、計算されていることに、初めて気づく。

カラヴァッジョの周到な計画により配置された剣の角度により、この背を向けて座る若い男のモデルとして役割が、以外に多いことに気づく。

この何気なく場面の引き立て役として座ったかのように見える若い男には、ペテロの質問を受ける役割だけでなく、彼の持つ剣によって、剣の軸線には、眼鏡の男の頭頂部へと向かう視線誘導補助線の役割があったことに気づく。

#### 5 ペテロの両足間の軸線方向 (4) ブルー

ペテロの足元に注目。

ペテロは近くの納税者側の男にも質問されている。質問に対し、ペテロは右手首を小さく回すポーズで、『向こうの人だ』、と答えている。

注目すべきは、【ペテロの両足の軸線方向は、眼鏡の老収税人の足元に向かっている】という事実だ。

ペテロの意識は、明確に眼鏡の老収税人に向けられているという意味であり、召命対象を暗示しているのだ。

## 6 視線誘導補助線を活用させたカラヴァッジョ

このように、カラヴァッジョは、観衆の視線を眼鏡の男に注ぐ工夫を種々込めていることが分かる。

この工夫は優秀なルネサンス画家であるレオナルド・ダ・ヴィンチの作品《最後の晩餐》に見ることが出来るが、ミラノで修行していたカラヴァッジョには、このサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ聖堂でレオナルド・ダ・ヴィンチの作品《最後の晩餐》や、サン・フランチェスコ・グランデ聖堂付属、聖母無原罪の御宿り信心会礼拝堂の《岩窟の聖母・ロンドン版》を見て学ぶ機会のあった筈だ。

視線誘導補助線は、ルネサンス期からバロック期にかけての優秀な画家ならば、必ず構図上考慮した。

恐らく、カラヴァッジョは《最後の晩餐》や《岩窟の聖母・ロンドン版》で見たレオナルド・ダ・ヴィンチの視線誘導補助線のテクニックを学んでいたに違いない。

視線誘導補助線を巧みに仕組んだ画面を創造したカラヴァッジョに乾杯。

## 6 見直すべきは、カラヴァッジョの真の画力

カラヴァッジョの画家としての天才的ひらめきを題材に記述された文章に出会うことは稀だ。

なぜなら、カラヴァッジョ絵画は、その生み出された初期から、絵画上のセンスや基礎デッサン力のない、いわば当時の素人美術評論家、ローマ・カトリック協会系美術史家ベッローリやボローニャ派の画家たちによって、散々な悪評を受け、カラヴァッジョの持つ優れた画面構成力は、その本質の一部しか理解されていなかった。

それどころか、カラヴァッジョが、おそらく考え抜いて構成し意図した場面は、誤解され、ローマ・カトリック教会派美術史家による誤った解説が400余年間放置され、世界中のこの絵画を見た観衆や教徒は、現在もその誤った解説を信じたままなのだ。

しかも、1980年代からは、もう一つの誤った説を唱えるドイツ学派美術史家の出現により、誤解説が更に加わった。

現代人の我々美術ファンは、誤解説をそのまま放置するとカラヴァッジョに申し訳ない、と思うべきではないか。

そして、カラヴァッジョが描いた《聖マタイの召命》の作品内容を、正確に理解してこそ、はじめて、カラヴァッジョ・ファンのひとりとして堂々胸を張ることができるだろう。